シラバス
【B―歴史①】

平成23年度研究科横断型教育プログラム（Bタイプ）授業科目

テーマ	歴史	研究科名	文学研究科	横断区分	文理横断型	開講場所	文学部新館で開催予定
授業科目名	歴史の力――現代社会・文化・科学を解析するための歴史的思考力養成講座			講義担当者所属・氏名	文学研究科教授　南川高志、同教授　伊藤和行、同准教授　中砂明徳、同准教授　吉井秀夫、同准教授　小野沢透		
配当学年	修士博士後期専門職	コマ数	5コマ	開講時期	5 月 12 日、19 日、26 日、6 月 2 日、9 日（木曜日）　16 時半～18 時	授業形態	講義・演習

〔授業の概要・目的〕

今日の歴史学研究の高度な発展は、大学学士課程一般教養程度の知識では想像できないような視点や方法で、過去の認識のあり方を変えてきている。この授業では、文学研究科で歴史学、考古学、科学史を研究・教育している教員が、各人の専門領域における経験を活かしながら、歴史的に思考するための方法や成果を、京都大学の大学院生に相応しい学的水準で紹介し、受講院生各人が「歴史の力」をその研究にいかせるよう、視点や論点を提供することを試みる。トピックは日本、アジア、ヨーロッパ、そしてアメリカから、そして素材も政治・経済・科学はもちろん、映画や核実験、大学教育と研究費獲得の問題など広範囲にわたって提供される。担当教員の講義に加え、講義後の研究分野の違いを超えた意見交換を通じて、参加大学院生諸君は、受講前よりもぐっと高いレヴェルの歴史的思考力を身につけ、新たな歴史認識と応用への視座と手段とを手にすることが期待される。

【研究科横断型教育の概要・目的】
日本においても世界にあっても、現代の歴史学は高度に専門化された人文学の分野であるが、元来は哲学と同様、すべての学問研究に必要とされる思考の基礎的な枠組みや認識と分析の手段を提供できる、懐の深い学問であった。あらゆる学問が分野ごとに専門化して全体を見渡すことが難しくなり、また旧来の専門領域の学問体系や方法では問題の解決が難しくなった 21 世紀の今日、文系・理系の違いにかかわらず、いま一度自らの研究のあり方や拠って立つ基礎について内省した上で前進をはかることが、一層必要となっている。このために、研究のあり方やその内実を歴史的な思考を働かせて再検討し、将来の新たな展開に向けて再構築していくことがきわめて有効かと思われる。
この授業では、人文学の専攻者はもちろんのこと、社会科学や自然科学を専門とする方の力にもなるような間口の広い議論が紹介され、検討の対象とされる。専門分化が激しい中で自身の狭い分野に籠もりがちな歴史学専攻の大学院生にとっても、視野を広くする貴重な機会になるとも思われる。

〔授業計画と内容〕

第 1 回（担当　南川高志教授）　この授業では、まず「歴史的に考える」ということが研究型大学の大学院でどのようなレヴェルの作業を意味するかを、現在の欧米歴史学界の最前線（「社会史」の定着と「言語論的転回」以降の歴史学界）の歴史認識の水準をたいへん平易に紹介しつつ検討する。次いで、2 つの事例を手がかりに、「歴史的に考える」ことが、現代を理解する(そして未来を考える)上でどのような働きをすることができるかを検討する。事例の一つは「現代に甦った古代ローマ帝国」であり、もう一つは「19 世紀ドイツの大学の興隆」である。とくに後者は、現代の大学での研究体制や研究者の姿勢、そしてそれをめぐる社会の動きを考える上で、いくつかの深刻な問題を提起することになろう。

第 2 回（担当　伊藤和行教授）　本授業では、「科学史」という学問分野についての簡単な紹介を行ったのち、過去の科学業績を現代の我々が論じることがいかなる意味を持つのかを、 具体的な史料の検討を通じて考えてみよう。取り上げるのは，近代科学の父といわれるガリレオ・ガリレイ（1564-1642）の望遠鏡による天体　観測である。なぜ彼が最初に月の凹凸や木星の衛星を発見できたのか、彼の観測が当時の宇宙像や学問構造にどのような革新をもたらしたのかについて考察する。また彼の「科学」の特色を、当時の代表的な「天文学者」であるケプラーとの比較を通じて検討しよう。

第 3 回(担当　中砂明徳准教授)　近頃、若い人の「中国離れ」どころか、日本人全体に「嫌中」感情が広がっていると言われているが、そうした状況にあるからこそ、アカデミズムの世界において中国を取り上げることの意味や、現実社会における中国の巨大なプレザンスにどう対していくかが問い直されねばならないだろう。この授業では、「中国に対する日本人の構え」について歴史的にさかのぼって考察するとともに、欧米の中国観と対比することによって日本人の中国観の癖（へき）を浮き彫りにするための材料を提供する。取り上げる話題は主に「江戸時代と明治以降における中国観の断絶面と継承面」「日本の中国研究と欧米の Sinology の違い」の2つである。

第 4 回(担当　吉井秀夫准教授) 人類の残したさまざまな物質文化を手がかりとして歴史を復原するという性質上、考古学の研究において、形質人類学・植物学・動物学・地質学・化学など、さまざまな理系の学問分野との連携は、大きな意味を有してきた。本講義では、そうした学際研究の実例を取り上げながら、文系と理系の研究者が共同研究を進めていく上での問題点と可能性について議論してみたい。具体的なテーマとしては、「遺跡探査の実際と評価をめぐって」・「理化学的年代測定法の新展開と問題点」の2つを予定している。

第 5 回(担当　小野沢　透准教授)　世界中の人々が多くの場面でアメリカ合衆国の国家・社会・国民のあり方を(肯定的にせよ否定的にせよ)念頭に置かざるを得なかったという点で，20 世紀は「アメリカの世紀」と呼ぶことが出来るであろう。特に世紀中葉の半世紀あまり，合衆国はハード／ソフトの両面で圧倒的なパワーを誇った。このパワーの源泉は多岐にわたるが，授業では，科学・技術の生産・活用・消費を促進する制度的基盤に着目する議論や，国際関係論の議論を手がかりに，「アメリカの世紀」を分析する視点を提示する。このことを通じて，受講生が，21 世紀のアメリカとそれを取り巻く世界情勢を長期的な視野に立って把握し得るような視点を獲得することを目指したい。

〔履修要件〕

歴史や歴史学に関する特別な予備知識を受講の際の前提とはしない。この授業は学士課程の一般教養歴史学の授業ではなく、広く京都大学大学院生に対して、その高度な研究に資することが目的の授業である。必要と思われるのは、自らの学問を自ら検証しようとする謙虚さをともなった学問的姿勢である。

〔修了証授与の要件〕

全回出席して積極的に授業にかかわり、受講終了後に5回のうちのいずれかの授業について、重要論点に関する自身の考えをまとめたレポートを提出した大学院生には、担当教員の判定により、修了証を授与する。
授業担当者の話を踏まえつつ、論点を自身の研究の問題として深部で捉えることができているかどうかが評価の目安となる。

〔教科書〕

教科書は使用しない。

〔参考書等〕

参考書は授業中に各担当教員が随時紹介する。

〔その他(授業外学習の指示・オフィスアワー等)〕

毎回異なったトピックで授業は展開されるが、その都度自らの問題として捉え、授業後にその内容を自らの研究に活かせるように自学自習を進めることが大事である。